

イスラームの基本的教え



セイイド ムハンマド ベヘシテイ著

は じ め に

今日、世界の至るところにおいてイスラームに対する関心が高まりつつある。多くのムスリム(イスラーム教徒)たちがイスラームについて更によりよく知りたいと望み、ムスリムでない人たちはイスラームについて学びたいと願っている。彼らは、この何億という信者数をもつ偉大な宗教であるイスラームの教えについて、またそれが他の宗教とどのように違っているのかについて尋ねる。このような関心は西側、特にイスラーム比較学のためのセミナーにおいて、若者たちの間で明らかに認められることである。

この小冊子は殉教者ベヘシュティ博士の貴重な遺作の一部である。これは行動におけるイスラーム的規範の原則と概略を簡潔に、しかし的確に示している。私たちはこのイスラームにおける偉大な人物の高潔な人格を明らかにする必要があるのを感じ、また最初にIPO (Islamic Propagaation Organisation:イスラーム布教庁)によって出版されたこの本を理解することがそのために相応しいと思い、ここに提供するものである。

ロンドンにある「アル・アスル教育研究所」はイスラームの教えに対する関心を高め、また関心を持った人たちが皆、イスラームをよりよく理解できる機会を提供するために設立された。

イスラームの基本的教え

唯一の神

イスラームの基礎・土台は「タウヒード」(唯一神信仰)である。「タウヒード」とは唯一の神を信じること、その他のどのようなものも礼拝しないようにすること、また神に礼拝し賛美を捧げること、そして神はあらゆるところに存在し、他のことはすべて、特に自然界の秩序は神の偉大な計画によるものであることを意味する。

信仰の第一の要件は「ラー イラーハ イッラッラー」(神のほかに神はいない)である。

イスラームへの第一歩は「アシュハドゥ アン ラー イラーハ イッラッラー」(神のほかに神はいないことを私は宣言する)である。

ただ単に私の舌だけではなく、私の心と内なる光が「宇宙を創造された方の他に賛美されるのに値する方はいない」と主張する。ほかの教えはすべて、このことの上に成り立っており、その基礎をここにおいている。従ってイスラームは「唯一の神を信じることこそが救いの道である」と宣言する。

「クル ラー イラーハ イッラッラー トゥフリフー」言いなさい、神のほかに神はいない、そのことによってあなたは救われる。これは『言いなさい、また真剣に行動しなさい。「世界を創造された唯一の神以外に称賛に値するものはない」ことを全身全霊をもって信じなさい、これがあなたの救いへの道である。』ということの意味している。

神についての正しい知識

イスラームは、神についての正しい知識を得ることに最大の重点をおいてきた。イスラームが卓越しているのは主にこの点においてである。そこで、イスラームを知るための基礎になるこの点について説明しよう。

見ることのできない神

イスラームがすべての人に対して、かれを信じるように招待する唯一の神は、五感によって接することができない。誰も神を見ることができず、触ることができない。この点についてクルアーンには「かれを視覚によっては把握することができない、かれはすべての視覚でとらえられるものの上にある。」(6章103節)と述べられている。

視覚によっての把握には色と形が必要である。しかし神は色彩を持たず、形もっていない。かれの栄光は視覚、その他の感覚の範囲を超えたところにある。

神はほかの何物にも似ていない

私たちは一般的に私たちの知っているもの:たとえば、花と果実、丘と谷、太陽、月、星について、また人間について頭の中に、あるイメージをもっている。しかし、神についてはどうであろうか?私たちは神についてもまた頭の中にイメージを描くことができるだろうか?いや、決してできない。

私たちの観念は、私たちの休むことのない心によって遂行されるが、それにもかかわらず、私たちが感覚を通して知るにいたった物事に基礎をおく経験の結果、あるいはその組み立て、分析から作られたものである。

クルアーンはこの点について言う。「天と地の創造主、かれはあなたたちのために、あなたたち自身の中からその配偶者を用意し、また動物にもその対のものを用意した。それによって、かれはあなたたちを増やされた。かれはすべてを聞き、見ておられる。」(42章11節)

しかし、神を絵画や像といった形で表すことはできない。またかれを想像することもできない。

全能であり力強い神

クルアーンは様々な機会に神についての違った、完全なる特性を述べてい

る。「彼は創造主、全能、すべてを聞き、見ておられ、すべてを導き、守護者、耐え忍ぶ方、寛大な方、常に赦される方、自足される方…私たちのもつとも秘密にしている考えを知っておられる。神はかれに仕えるもののすべての祈りを聞かれ、すべてのものにその与えられるべきものを与えられる。ほかの何物よりも私たちに近く、私たちにより慈悲深く優しい神である。」

神の称賛

人間の心はますます相対的観念を扱い、考えなければならない。つまり人間の観念は、クルアーンが述べている神の特性を理解しようとするときでさえ、相対的観念に依存する。それゆえ人間は迷い、誤りに陥りやすい。この人間の心の欠陥のため、クルアーンの中には、私たちの思考における先天的な欠陥である不完全さから神が純粋であり、無縁であることを強調する多くの節がある。

神には子供たちがいるであろうか？

これらの誤った観念の中のひとつが、神が子供たちをもたれるというものである。イエス(彼の上に平安あれ)が神の子であると信じている人々がいる。天使たちが神の娘たちであると信じている人々は過去にも現在にもいる。聖なるクルアーンはこの点について述べている。「…そして彼らは何も知識をもたないために、かれに息子たちと娘たちを配した。かれに賛美と光栄がありますように。かれは彼らがかれに配するどのようなものよりもはるか高くあられる。天と地の造り主、配偶者のいないかれがどうして子供をもつことができるだろうか？かれはすべてを創造され、すべてを知っておられる。それが神であり、あなたの主であられる。すべてのものの創造主であるかれのほかに神はない。それで、かれを礼拝しなさい。かれはすべてのものの擁護者であられる。」

(6章100～103節)

「そして彼らは『神が息子をもたれた』と言う。かれに賛美と光栄がありますように。いやいや、天の中、地の上にあるすべてのものは彼のものであり、すべ

てのものがかれに従う。」(2章116節)

天使たちとみ使いたちが神の子であることに対してクルアーンは私たちに警告する。たとえ彼らには優れた点があることを認めるにしても、彼らはかれのしもべであって、決してかれの子であるとは考えられていない。アダム、ノア、アブラハム、ロト、フード、サーリフ、イスマイル、イサク、ヤコブ、シュアイブ、モーゼ、ヨシュア、エノク、ヨハネ、イエス、ムハムマド、その他のみ使いたちはすべて人間であって、神のしもべであるという点において、私たちと似ている。かれはほかのものを創造されたのと同じように彼らを創造されたのである。

イエスが神の息子であるという彼らが、もしも私たちが自分の子供たちの父親であるのと同じような意味で、神が父親であると言っているのであれば、彼らのかれに対する説明はまことに不適切である。

神はそのような未熟な幻想を超越しておられる。もしも彼らが違った意味で言っているのであれば、神の息子というような紛らわしい表現を使わずに、違った表現を使うべきである。

比較の危険

神の息子というような表現を使うことは、何物もかれに似たものはいないところの唯一の神が、雲の上に存在する賛美すべき人間として、考えられ、空想される危険をはらんでいる。これは人間の考えを正しい方向から逸脱させ、神を正しく知るにあたってのつまずきとなるであろう『神の擬人化』という危険である。

多くの信者たちの何の根拠ももたない空想じみた信仰、また多くの不可知論者と一神論者たちによってなされる弱い反対は、ほとんどすべてがこれらの人たちによる神の擬人化によって空想された不適切な考え・観念の結果である。信者は空想の世界で何かを創造し、それを神と呼び、礼拝する。そしてそれを見て、不信者たちはそれが何の根拠もない考え・観念であることを発見し、その結果、神の存在を全面的に否定する。しかしながら、本当は両方とも誤っている。イスラームにおいてすべての人が信じ、礼拝するように

招いている唯一の神は、その中のどれでもなく、またそのような誤った概念を超越している。イスラームの最初の最も重要な教えのひとつが、このような神の他者との比較という考えから完全に遠ざかることであるのはこういう理由による。

イスラームと神、人間、宇宙の関係

神を相応しく、正しく認識することは、人間と宇宙を正しく理解することにも関係するとイスラームでは考えている。イスラームの教えによれば、人間の本性と存在についての知識が深まれば深まるほど、私たちの神についての知識はますます完全になり、真実に近づく。

「自分自身を知るものは誰でも自分の主を知る。」

一般的に言って、このことは創造についても真実である。被造物についてよりよく理解すればするほど、創造主である神をよりよく理解するのに役立つ。それとは逆に、人間と宇宙、特に神と人間、宇宙、天使たちとの関係についての誤った、あるいは根拠のない考え・空想は、創造主である神についての誤った概念を導き出す。なぜならば、原因についての知識と、その結果についての知識はお互いに密接な関係があるからである。

「アッラーは人間に何も下されなかった、と彼らが言ったとき、彼らはアッラーをかれの価値に従って判断しなかった。言いなさい。それでは人間のための光と導きとしてモーゼがもたらした本はいったい誰が下したのか？しかしそれからあなたたちは真実を隠しながら、見せびらかすための多くの印刷物をつくった。」

これらの多くの節から、神についての認識と人間、宇宙に付いての理解のあいだの相互の密接な関係は簡単に導き出せる。

人間と宇宙

あなた自身を認識しなさい。イスラームの教えは言う。「人間よ、あなたはその高貴な立場を忘れ、その場、その場で恐怖に駆り立てられて太陽、月、星、

山、風を礼拝する。それらのものは偉大で力強いものとしてあなたの前に現れる。あなたたち、力をもち、富める者の権威と偉大さにその魂を支配され、畏敬の念をもってそれらを見つめ、自分の神となし、へりくだって礼拝し、自分自身をその奴隷とするあなたたち、深い眠りから目覚めなさい。天と地にあるいかなるものもあなたたちの支配権をもっているわけではない。あなたたちは自分たちの価値を認識せず、そのようなものたちのもとにある何の価値もないもののために自分自身を投げ捨てている。立ちあがりなさい。神があなたたちに付与されたあなたたちの力を知り、その才能を正しく使いなさい。もしあなたたちが神の命令に留意するならば、あなたたちは決して小さな者ではなく、それらのものもあなたたちが思っているほど偉大なものではないことがわかるだろう。」

自然を支配しなさい

人間のまことの価値はいかに自然を征服し、それを服従させるかによって決まると、イスラームは公然と主張する。クルアーン31章20節では次のように述べている。「アッラーは天と地にあるすべてのものをあなたに従わせられたことを見たことがないのか？また、明らかな恩寵、秘められた恩寵を比類なくあなたたちに注がれたではないか？…」

また14章32～34節では次のように述べている。「神は天地を創造し、空から雨を降らせ、そこにあなたたちを養うために果実を実らせた。また彼の命によって、あなたたちが海を航海できるように船をあなたたちの支配のもとにおかれた。また、河川をあなたたちの支配のもとにおかれた。そして、太陽と月をその運行の法則に従ってあなたたちに従わせ、昼と夜をあなたたちの支配のもとにおかれた。そして、あなたたちが求めるものはすべて与えられた。もしあなたたちがアッラーの恩寵を数えようとしても、それらを数え上げることはできない。まことに人間は不正であり、恩知らずである。」

これらの節、また他の多くの節は人間が自然を支配することができることを示唆している。千四百年前には人間は単に羊、家畜、駱駝と象を支配できるだけでの状態であった。人間はそれらのミルク、肉そして皮を利用すること、

それらに乗り、背中に荷物を載せることを学んだ。また、人間は海を征服し、その荒波を大小の船に乗って越え、商品を載せて航海することを学んだ。また、荒れ狂う河川にダムを建設し、それらの水を果樹園や田畑に導いて利用することを学んだ。

しかし人間は常にそれらのものを支配してきたであろうか？ 非常につまらないものでさえ、人間が支配できる範囲を越えているときがあった。それらのすべて、あるいはいくつかのものを恐れて、人間はそれらに立ち向かう勇気がなかった。時がたつにつれ、人間はそれらのものを恐れる理由は何もないことを学び、理性的とは言えない恐れを振り切って、その内なる能力を开花させ、労働の結果、また思考の光に照らされて、人間はそれらを征服し、支配するようになった。さてクルアーンは、人間により一層その広い影響範囲を考えるよう勧めている。

昼と夜、太陽と月と星々、一言で言えば大自然は、その主権によって、人間が自分に公正であり、無知と欲望におぼれず、また誤った道を通らず、神が人間のために定められた正しい道を選び、創造主に感謝を忘れない限り、人間の支配に服するということを伝えなさい。

人間と神

あなた自身についてもう一度考えて見なさい。イスラームは人間に自然を征服するように勧めると同時にこうも警告する。「人間よ、あなたの力を増やそうという思いが、中庸の道を超えて反対に虚栄まで行ってしまっはいけない。あなたはその力にもかかわらず、本当は海の上の泡みたいなものだということをもう一度よく考えて見なさい。あなたがその若さと働こうという気力、考える力を失うのはそう遠いことではない。あなたは経験の力と科学によって力を追い求めているにもかかわらず、刻一刻と病、衰え、老いに苦しめられ、あなたは自分のそばのダニを追い払うことさえできないようになる。あなたはこの変化が何を意味するものか知っているだろうか？ あなたの高貴な地位について語ったが、その生命が自分自身によっているものは何もなく、永遠であるものもなく、すべてのものは唯一永遠なるもの、すべてのものから独立し、依存

しない存在である神の恩寵の放射を受けて存在している宇宙の一部に過ぎないことを示しているのである。それゆえあなたの魂からあなたの生命と存在そのものが依存しているかれを遠ざけてはいけない。かれとの結びつきを強固にし、ますます彼に近づくように努めなさい。」

神に近づくこと

私たちはどのようにして神に近づくことができるだろうか？神の完全さ、その存在には限界というものが無い。一方でそのほかの存在は相対的なものである。私たちの宇宙の相対的な存在は発展途上にあり、内なる光によって、完全性を求める。完全性を求めることはすなわち神を求めることである。人間は相対的に完全性を手に入れればいれるほど、神、絶対的な完全性に近づくのである。

人間はその内なる光によって完全性を求める存在のひとつである。しかしながら、どれだけ一生懸命に努力しても、その相対性を抜け出すことはできない。しかし人は歩きつづけ、その完全性を増し、そうすることによって絶対的な完全である神に近づくことができる。これが、イスラームにおける神に近づくということの本当の意味である。イスラームの教えによれば、一般的に礼拝のどのような行為も、それが完全への道を歩む助けになるか、すでに到達した完全さを維持する助けになる時のみ神に近づく手段であると考えられる。

祈り

すべての人間はあらゆる時と場所で、神に接することができる。誰でもかれに向かい、助けを求めるに違いない。クルアーン3章186節では次のように述べられている。「そしてわれのしもべたちがわれについてあなたに尋ねるとき、われは本当に彼らの近くにいる。彼がわれに呼びかけるとき、われはすべての祈願するものの祈りに答える。」

祈りの基本的な条件は全身全霊をもって神に向かうことである。神が時と場

所に関係なく、誰の執り成しも必要とせず、彼の祈りに答えられるのはそのときだけである。

罪、悔い改め、赦し

罪人たちはどのような時と場所においても罪を繰り返さず、正しい道を歩き、神の慈悲を期待し、ほかには頼るべき何物も必要としないかもしれない。クルアーンはこの点について述べている。「言いなさい。自分自身をむだ遣いしたわれのしもべたちよ、アッラーの慈悲に絶望してはならない。アッラーはすべての罪を赦される。かれはたびたび赦される方であり、最も慈悲深い方であられる。」

「あなたは(悔い改めて)主のほうを向き、そしてあなたの上に罰が下り、あなたがもはや助からなくなる前にかれの命に服しなさい。」(39章53～54節)

神と宇宙

宇宙とそれが含むすべてのものは神の被造物である。自然の法則を含む宇宙を支配している法則は、かれによって命じられた神の法であり、慣習である。クルアーンの節では一般的には自然に帰せられる出来事(ある点から言えば真実であるが)神のみ業として考えられている。この点について14章32節には次のように述べられている。「神は天地を創造し、空から雨を降らせ、そこにあなたたちを養うために果実を実らせた。また彼の命によって、あなたたちが海を航海できるように、船をあなたたちの支配のもとにおかれた。また河川をあなたたちの支配のもとにおかれた。」

これらの節は、イスラーム的な考え方によれば、自然界の秩序は神とその法に反するものではないことを、私たちに教えている。むしろ、それは神の創造とその秩序の一部であると見なされている。それゆえ、神とその無限の力を信じることは自然を無視するという態度には結びつかない。神の無限の力を信じることは、決して人間を自然への科学的理解、その受容から遠ざけるものではなく、また自然への関心が無信仰という結果に結びつくものでは

決してない。神を信じる人の科学的知識はその理論的側面、実践的側面、両面において不信者の科学的知識と似ている。自然を理解すること、またその力を利用することにおいて、彼らはともに手を取り合っ前に進む。神を信じる科学者は科学的研究とその技術的応用に忙しいけれども、自然の束縛の中に彼の意識は束縛されないという点でのみ不信者たちとは異なる。そういう人にとって、自然はそこに創造主である神を見るための鏡である。一方、神を信じない科学者は自然にあまりにも夢中になるために、その限界を超えて創造主に達することができない。

奇跡

奇跡を信じるのがムスリムの科学者の仕事、研究に影響を与えることはない。なぜならば、奇跡は必要なときに、その特別な秩序に従って起こり、きわめて稀にしか起こらないからである。自然の秩序において、奇跡の起こる割合は十億分の一よりも少なく、そのような例外は科学的法則やその技術的応用の価値に何らの影響も与えない。それゆえ奇跡を信じることは自然の秩序の否定を意味することはなく、またその反対のことも言える。

神のしもべ

自然とそれを構成している無限の活動的なものたちは神に服従している。自然の驚くべき秩序は神のご意志の反映である。すべての自然現象、原因とその結果、物質的、自然的な出来事は、全能、全知の神とそこのご意志の反映である。なぜならば自然界で原因とされるものの働きは永遠に神の命令によるものであるからである。

終わりなき宇宙

クルアーンの節は明らかに『私たちが生きている世界は終わりが無い』ことを主張する。

「もしもあなたが神の恩寵を数えようとしても、数え上げることはできないだろう。」(16章18節)

さらに神はそのお望みのままに創造を増やししながら、不断の創造を続けられる。

「かれは、そのお望みのままに創造を増やされる。アッラーはすべてのことに力をもっておられる。」(35章1節)

それゆえ、無限の宇宙資源を利用する観点から、科学と技術における人間の進歩は決してとどまることはなく、活動と努力を続けるための扉は常に開かれている。

運命と自由意思

運命と自由意思についてイスラームでは、一方において神が人間に授けられた知識と能力を使い、正しい判断を下すように努力することを、一方では人生においてよく起こる困難に耐え忍び、それに負けないよう努力することを、また人間の意志の力を強めるように強調している。そして、人間が社会的、あるいはそれ以外の困難に直面したときに、無気力になることや、これが運命だからというような投げやりな態度をとることに反対している。また人生において、より厳しい事実に向き合うときに、自分と正面から向かい合わない人を軽蔑する。

イスラーム、現代の科学と技術

今までに見てきたように、イスラームは科学、技術の進歩に反対しないだけでなく、むしろ次の二つの点を強調し、それを守りながらそれらの進歩を勧めている。

- 1: 科学、技術そして社会の進歩が人間を傲慢にし、そのことによって、創造主を無視するようになってはならない。
- 2: この努力と進歩は人間のおかれた状況を改善するために利用されるべきであって、罪を広めたり、抑圧を支えるために使われてはならない。

預言

人間は、自然に関する問題、物質的な問題についてはその思考範囲を雲の上まで広げ、可能性を広げ、進歩を期待することができる。それゆえ、神のみ使いたちはこのことについて、特別な権能をもたない。しかしながら、自然に関する問題以上の事柄を解決するため、また来世と人間の行く末について洞察するために、人間は神からの導きを必要としている。

神が人間に与えられる救いと導きは、神がその啓示を下される人間を通じてのものであり、その人は仲間を導き、啓示されたことを教えるように命じられる。そのような人たちが預言者である。

預言者たちの教えは科学的研究や経験の結果ではなく、啓示によって彼らに下された神の教えである。

「そして彼(ムハムマド)は気まぐれによって話すことはない。啓示されたものを話すだけである。大いなる力をもつ方が彼に教えられたのである。」

(53章3～5節)

預言者たちへの正しい評価

クルアーンは私たちに、預言者たちはその本質において人間であるが、人々を導くために啓示を受け、それを伝えるという点においてほかの人とは違う、ということを繰り返し思い出させる。彼らはその他の点においてはほかの人とまったく違わない。彼らは、ほかの人たちと同様に生まれ、食べ、飲み、眠り、排泄し、子供をもち、人生を生き、そして死ぬ。

ムハムマドについてクルアーンは言う。「言いなさい。わたしはあなたたちと同じような人間に過ぎない。私に啓示されたのは、あなたたちの神は唯一の神であり、主に会おうとする人は誰でも正しい生活を行い、主を礼拝するにあたり、かれに仲間がいると空想してはいけないということである。」

(18章110節)

すべての神のみ使いたち、その中にはアダム、ノア、アブラハム、モーゼ、

イエスがいるが、彼らについてイスラームでは、彼らはすべて預言者の地位まで上げられたという点では同じであって、唯一の違いは、彼らに従う人たちに伝えるために神から啓示を受けたことである。

預言者たちによる奇跡

クルアーンはまた、預言者たちによってなされた奇跡についても述べている。しかしながら、奇跡を行うのは彼らの自由に任されているわけではないことが、多くの節の中で強調されている。

彼らは私たちがもっている以上の特別な能力をもっているというわけではない。それゆえに奇跡を行うよう要求される。イスラームに反対した人たちは常に預言者が奇跡を行うよう要求した。彼らはこう言ったに違いない、『もし彼が本当に神の預言者であるならば、がたがた騒がずに特別なことをやって見せることができるはずだ。』と。それに対し預言者はこう答えただろう、『私はあなたたちの気まぐれに付き合うために奇跡を行うようには命令されていない。』と。

あなたたちが神の預言者たちの奇跡として聞いた話は、その個人的資質に関係なく、奇跡を行うことが必要なときにのみ行われた。したがって奇跡が預言者を特別にほかの人以上に高く上げることはない。クルアーン6章109節、17章90～93節ほか参照

科学、理性と啓示

神の預言者を知るまでは、真理を得るための源は、経験、思考、科学、理性に基づく知識だけであった。しかし、私たちが一度神のみ使いたちを知り、また彼らは神からのことしか言わないことに確信をもつとき、私たちは真理に到達するための新しい源泉、つまり啓示に基づく預言者たちの教えを得た。人間はこれ意外に、自分と神との接触、来世の問題、また神を喜ばせ、永遠の幸福をもたらす生活の方法についてのよりよい源を見出せない。

すべての預言者たちを信じ、褒め称える

イスラームはムハムマドだけの信仰ではなく、すべての預言者たちの宗教でもあることを公然と宣言する。なぜならば、真理に従うという意味であるイスラームは、神とその教えに従い、利己主義やこれらについての誤った考え方を知っているからである。したがってイスラームは預言者たちの宗教であるばかりではなく、真理を求める人々の宗教である。これがムスリムたちがすべての預言者たちとその經典に敬意を表し、それらを信じる理由である。

「み使いは彼の主から彼に下されたものを信じ、信じる人たちは皆、神とその天使たち、かれの本、み使いたちを信じる。(そして言う)『私たちはかれのみ使いたちの間に何の差別も設けない』と。そして彼らは言う。『私たちは聞き従う。私たちの主よ、私たちを赦して下さい。私たちはあなたのもとに帰る。』と。」(2章285節)

逸脱

神のみ使いたちの教えは不純な動機をもつ人たちの手によって、また様々な迷信が入り込んだことによって、次第に変更され、墮落していった。状態は悪化し、資格を持った学者たちでさえ、大変な苦勞をし、学識をつんでもなお、預言者たちの真の教えを識別することができなくなった。悪意を持った敵たちと同じように、無知な友人たちが宗教の源泉と神の經典さえ改ざんしたからである。そのような状態のもとでは、新しい預言者を送り、再び啓示を下し、それによって神の真理が新しく得られることが、本来の教えを思い出させる唯一の方法である。クルアーンは、ほとんどの預言者たちの物語の中で、この点について説明している。

ムハムマドとクルアーン

上に述べたような状態は七世紀になって改善された。その当時、もし誰かが真剣にアブラハム、モーゼ、イエス、その他の預言者たちの教えを求めようと

しても、もはや真理に到達することは不可能な状態になっていた。なぜならば、信頼に値する源泉を見つけることができなくなっていたからである。モーゼの律法五書はもはやその(最初の啓示からの)明確な歴史がわからなくなっていたし、福音書やそのほかの預言者たちの教えも同じような状態になっていたからである。それらの経典は改ざんされ、もはや価値がないものになっていた。そのとき、神はその啓示を下すために、ムハムドを選ばれ、彼が(新しい啓示を)人類に伝えたのである。

ムハムドが預言者として啓示されたクルアーンの節は、真似しようにも真似のしようがない、まったく新しい、神秘的なスタイルであって、それがまったく疑う余地のないことは歴史が証明している。

このことはクルアーンを変革、改ざんから守るために効果的であった。さらに、クルアーンと名づけられたこれらの節は誰にでも入手可能であって、急激に広められた。それによって、ムハムドの死後1334年間、クルアーンはまったく改ざんされなかった。今日でも、クルアーンを14世紀前に啓示されたままの形で、数えきれないコピーがある中で、いささかの違いもなく入手することができる。高い権威をもつそのような経典をもつことはほかのどの宗教にもないイスラームだけの特色であって、それによって誰でも、またどのような時、場所においても、それを直接理解し、理解する際の誤りから免れることを可能にしている。

来世

預言者たちの教えのひとつは、人間の存在はその死をもって終わるわけではないということである。死は、人間の苦しみと試練、努力の期間の終わりに過ぎない。この期間に人間は自分自身のために、また自分の判断によって、誤った道の中から正しい道を見つけ出し、自分の歩む道を決定しなければならない。人間は、この期間が常に変化している状態にあることを知り、もし正しい善の状態にいるならば、それを維持し、また、もし誤った悪い状態にあるのであれば、それをよい方向に変えるように求めなければならない。死によって、変化の状態は終わり、永遠の状態になる。それからは人間は変化しな

い状態に入る。それは彼がこの試練の期間に行ったことの結果を見る場所である。これが人生、死、来世についてのイスラームの教えである。

「その日、人々は墓から続々と出され、その行ったことを見る。たとえ一粒の重さほどでも、よいことをしたものはそれを見る。またたとえ一粒の重さほどでも悪を行ったものはそれを見る。」(99章6～8節)

楽園と地獄

楽園とは何だろうか？それは祝福された幸せな人の永遠の住みかであり、平安の住みかであり、正しい人たちが生きている間に、誠実に真剣に、自分自身のために用意した住みかであって、神はその努力を喜ばれる。

地獄とは何だろうか？それは悪をなすものたちが悪いことを行い、他人を抑圧し、悪い行いを広め、悪の道を歩むことによって、自分自身のために作り上げた永遠の苦しみと罰の住まいである。

イスラームのその他の教え

これまで述べてきたことはイスラームの基本的な教えである。イスラームはその他の分野においても多くの詳細な教えをもっている。一方ではこれらの基本的な教えに基づいたことを扱い、他方では、物質的、精神的に人間の個人的、家庭的、社会的な必要に関することを扱っている。

礼拝、断食、ハッジの巡礼、神の宗教を伝えること、神のしもべたちを抑圧から救い、政府を監督し、正義に基づいたまことの社会的、経済的な秩序を確立するために努力すること、自分の仲間を愛すること、助けを必要としている人たち、孤児、貧しい人たちを助けること、真実と誠実、純粹、この教えによって、心と身体健康を得るよう常に努力すること。

これらのことについて詳しい話をするのは一、二の短い文章によってはとても無理である。私たちは皆さんのもとにそれが届くように努力したいと思っているが、イスラームについての多くの話、印刷物によってそれをお知りになるように望むものである。